相賀 由美子（筑波大学大学院／道徳教育学）

白 バ ラ の 祈 り

～ゾフィー・ショル、最後の日々～

© Jürgen Olczyk

- 種別：DVD ビデオ（映画）
- 監督：マルク・ローテムント
- 製作年：2005 年
- 製作国：ドイツ
- 発売元：カルチュア・パブリッシャーズ／双日株式会社／朝日新聞社
- 販売元：BIG　TIME　ENTERTAINMENT
- 時間：本編 121 分
- 音声：ドイツ語
- 字幕：日本語
- 価格：¥4,935（税込）DVD 発売中

あらすじ

1943 年、ヒトラー政権末期。ヒトラー打倒を叫び､市民に自由を呼びかけた実在の抵抗グループ“白バラ”の紅一点、ゾフィー・ショル。ナチスに逮捕された当時 21 歳のミュンヘン大学のゾフィーが誇り高く生き抜いた最後の 5 日間を、新たに発見された資料に基づき描いた感動の実話。

Chapter

1. オープニング／8’10
2. 決行前日／11’07
3. モーアの取り調べ／14’05
4. 尋問／16’06
5. 白バラは黙さず／15’03
6. 貫いた信念／11’44
7. 公開裁判前日／9’22
8. 2 月 22 日午前 10 時／12’03
9. 判決／6’46
10. 最後の別れ／4’52
11. 太陽は輝き続ける／5’04
12. エンディング／5’54

シーン再現

◆取り調べが続く。その中でゾフィーの言葉が取調官を何度か黙らせる。

取調官　：私は法に従っているのだ。法律のほかに何に頼れというのだ。

ゾフィー：良心よ。

取調官　：ばからしい…。

取調官　：（罪が軽くなる妥協案を出しながら）過ちを認めても裏切りにはならない。

ゾフィー：でも、信念を裏切るわ。間違った世界観を持っているのはあなたよ。最善のことをしたと信じるわ。後悔はしていません。結果を受け入れます。

◆見せしめの裁判にて､権力の前に口を閉ざす人々の前で､怒鳴りたてる裁判官に一言。

ゾフィー：支配できるのは平和、人間の尊厳、神と良心、愛である。…大衆は私たちを支持します。無言の声で。

教育学の視点から

精神的な自由とは？

裁判で訴えかけるゾフィー

タイトルの「白バラ」とは、「打倒ヒトラー！」を市民に訴え、町中の壁にスローガンを書き、6 回にわたって市民に自由を呼びかけ、ナチス・ドイツの劣勢のありのままの現状を伝えるビラを作成し、配布した抵抗グループである。この中心メンバーは、ゾフィーらを含む 5 人の大学生であったが、多くの高校生もいた。当時高校生で生き残ったある人は、「権力の前に無力な大人たちに、『僕らだっておかしいってわかるのに、なぜわからないの？』っていう気持ちだった」と語っている。

ルドルフ・シュタイナー（1861-1925 思想家・教育家）は、青年期で特に重要なこととして、青年が確かな道徳的な宗教的な諸感情を発達させる存在であるということだと主張している。さらに、青年期とは様々な世界の出来事に対して、いかなる原因で生じ、いかなる過程を経て、いかなる結果として生じたものなのか、といった原因、経過、理由、結果の視点で理解し、世界の根底にある法則を認識しようとする存在であるとしている。したがって、「真理に対する感情と真理への探求心をもつ青年に対して、大人たちが不十分な解答しか示さなければ、青年はぼろぼろになってしまう」とまでシュタイナーは言及する。

この映画はそんな青年期の若者たちに、ある真理を示す。「法の正義」を信じる取調官と「良心の正義」を信じるゾフィー、また、信念を通せる「強さ」と真理から目をそらす「弱さ」を対照的に映し、そのどれもが、人間の姿であることを示す。われわれ人間がどんな存在であるのかをきれいごとではなく、きちんと認識させてくれる。そして、「精神的な自由」とは何かを教えてくれる。大人でもできない道徳観を子どもに押し付けるのではなく、きちんとこの世界の真理に向き合わせることが、道徳教育に求められているのではないだろうか。

ちなみに、私の娘はゾフィーと同じ 21 歳である。処刑台に向かう娘に「お前は正しい。誇りに思う。天国で会おう」と告げた両親の姿に涙が止まらなかった。

Information

【書籍】

・ インゲ・ショル／内垣啓一訳『白バラは散らず』未来社、1964 年

・ ベティ・ステイリー／高橋明男訳『思春期の危機をのりこえる：シュタイナー教育の実践的十代論』小学館、1996 年